PROJECT

複数の「歴史」とポリティクス ──中国的文脈と特色の解明にむけて

文・写真
長谷川清

共同研究 ● 資源化される「歴史」──中国南部諸民族の分析から（2014-2017 年度）

共同研究の進行状況

本プロジェクトでは、中国において現在進行中である歴史の資源化をめぐる多様な動きに注目し、民族誌的データに基づく事例分析と比較検討を重ねてきた。2016 年度についても前年度と同様、3 回の研究会を実施した。これらを通して、国家や政府、民族／エスニック集団、ローカルなコミュニティ、他の様々な社会集団などを構成する諸主体が参画・関与し、経済利益の獲得や政治目的ばかりでなく日常生活での文化的消費のニーズにも対応した形で、歴史の資源化が進行している状況がさらに明らかになってきた。そこで表象されている多様な「歴史」は、現代世界で急速に進む政治、経済、社会、文化のグローバル化やアイデンティティ・ポリティクスに共鳴しあうところがある一方、「中華民族」の一体性との接合や諸集団の歴史的過去にかんする公式のディスコースの再構築という意味あいも込められ、中国社会の諸文脈のなかに埋め込まれている。

歴史の資源化という視点から、これらの問題群に対して人類学的アプローチによる分析を行うことは、歴史や集合的記憶を対象とした人類学的研究の領域を拡大していくうえでも意義があるだろう。とくに、中国研究ではこうした視点からの検討が十分には展開されていない。以下、2016 年度に実施した研究活動を報告したい。

第 1 回では、樫永真佐夫（国立民族学博物館。以下、民博）「ベトナム、マイチャウにおけるターイの移住伝承の資源化」、上野稔弘（東北大学）「中国の非漢民族無形文化遺産をめぐるポリティクス──『少数民族非遺藍皮書』を読み解く」が報告された。樫永は、ベトナム、マイチャウのターイ文化（白タイ）にかんする私設博物館の建立やその経緯、社会的意義、伝統文化の保存・継承をめぐる課題などを検討した。とくに、ターイ文書を例に、それが資源化されていく過程で、どのような再編や再解釈がなされているかを検討した。

上野は、2000 年代以後、中国全土で推進されている非物質文化遺産（無形文化遺産）政策を取り上げ、マクロな観点からその動向に対する分析を試みつつ、歴史の資源化と無形文化遺産の関係などについて検討を加えた。そして、無形文化遺産の保存や真正性の維持、市場経済化にともなう社会変容や文化生態環境の変化、伝承者の減少や世代間における断絶などへの対応が民族政策や文化行政の課題となっていると論じた。

第 2 回では、共同研究「中国周縁部における歴史の資源化にかんする人類学的研究」（2015-2017 年度、研究代表：塚田誠之）との合同による国際シンポジウム「中国における歴史の資源化──その現状と課題にかんする人類学的分析」（2016 年 10 月 22 日、民博）を開催した。このシンポジウムは中国南北の諸民族・地域における歴史の資源化の現状をマクロとミクロの両面から比較検討する試みであり、3 つの分科会において 6 つの事例研究が報告された。本プロジェクトのメンバーからは、韓敏（民博）「岳飛の社会記憶とその資源化──杭州岳廟を中心に」、高山陽子（亜細亜大学）「烈士陵園の景観──南部と北部の記念碑の比較から」、稲村務（琉球大学）「ハニ＝アカ族の記憶と記録」が報告された。

韓は、歴史上の英雄的な人物として中国社会で広く崇拝されている岳飛にかんする社会記憶を整理し、墓・廟およびそれらの題字、伝説、儀礼などを総合的に分析した。王朝・国家、地方行政、岳廟文化研究会、岳氏一族がどのように記憶を保持しているか、社会的な結合や国民文化の構築のための歴史・文化資源としてどのように利用されているかを明らかにした。高山は、中国革命の進行過程で出現した顕彰・追悼の施設である烈士陵園に注目し、烈士陵園の様式の歴史的変遷と記念式典の意義について、革命の記憶という視点から考察した。稲村は、雲南のハニ族の歴史・記憶にかんして、「内的歴史」「外的歴史」という分析概念を提示し、父系の系譜伝承、土司（王朝側から官職を授与された土着民族の首長）の歴史文物や文書史料などにかんして資源化の現状を論じた。

第 3 回では、高山陽子（亜細亜大学）「革命の記憶の資源化──中国の記念碑の事例から」、長谷川清「問題点の整理と課題」が報告された。高山は、中国各地に建立されている記念碑を事例に、中国革命の記憶が資源化されていく過程を詳細に検討し、記念碑や烈士陵園が政治的な国家統合や観光開発

民族英雄・鄭成功にかんする史跡（2016 年 3 月 25 日、厦門市・演武公園）。

販売される古道具や骨董品（2016 年 8 月 29 日、芒市）。

第二次世界大戦の時代を紹介する写真展（2016 年 8 月 29 日、芒市）。

にとって、不可欠な資源となっている点を明らかにした。長谷川は、これまでの共同研究の討議の内容をふまえ、理論的な枠組みにかんする議論が不十分であったとし、どのような可能性を今後提示していくかについて論じた。さらに、これまでの民族文化資源をめぐる各メンバーの研究活動を整理し、そこで得られた知見を歴史の資源化という新たな研究分野の展開にどのように活用できるかを総括した。

「歴史」とポリティクス

この共同研究で対象としている歴史は、歴代の中国王朝が編纂した歴史書に記録される事象や出来事そのものではなく、仮に文字による記録があったとしても断片的であり、個人や集団レベルで民間に保持される記憶や非文字資料などで補ってはじめて考察を可能とする類いのそれである。そして、関連する史料や文物の多くは民間のエリートや知識人、民衆によって生み出されたものである。したがって、公定の史観やイデオロギーに基づく「単一の」歴史ではなく、複数性を特徴とし、多様な社会状況や複雑な関係性を背景に、矛盾や齟齬、不一致を内包している。

過去に生起した事実のすべてが歴史となる訳ではない。歴史は、「起こったこと」や「語られたこと」をめぐって多様な諸主体がかかわりあうなかで紡ぎ出される、過去についての解釈や想像の産物である。物語り（ナラティブ）の性格をもち、特定の関心や価値判断に基づく取捨選択によって組織化された過去についての知識の集積でもある。また、加工や脚色、再解釈がほどこされ、宗教儀礼や芸能、戯曲、舞踊などのジャンルへと移し替えられる側面をもつ。

したがって歴史は、潜在的な可能性の束（＝資源）とすることもできるし、そうした資源化による文化的産物でもある。しかし、歴史哲学によくあるような抽象性の高い思弁的な議論を回避するためには、ここで問題としている資源を「歴史として記述」や「人に歴史を感じさせる物質的な媒体」に限定した方が議論としては具体的で生産的であるとの指摘が共同討議の場で出た。また、資源化という概念だけでは分析が深められず、補助的な概念や用語として歴史意識、口承史、記録化、史料化、歴史化などについての理解も必要であるとの認識が確認された。その他、歴史記述における物語り論（ナラティブ）アプローチとの異同、伝統的あるいは現代の中国社会における公式の歴史言説の圧力、共同体の歴史と記憶との関係なども重要な論点である。これらの課題を含め、本プロジェクトの根幹をなすキーワードの「歴史」と「資源化」をめぐって、さらに議論を深めていくことが最終年度の総括には不可欠である。

中国的文脈と特色の解明にむけて

「歴史」とみなされたものがすべて市場経済のなかで資源化されていくとは限らない。何が資源化されるかは当該の集団やコミュニティが属する政治的文脈や社会経済状況の違いによって異なっている。その際、独自の書記法を発達させ、長い歴史をもつ文明社会として、王朝体制と統治システムを発展させてきた中国では、正統な文字メディア＝漢字による歴史事象の記述や史料化が早くに起こっている。つまり広義の意味での歴史の資源化が長期にわたって進行してきた。他方、いずれの王朝体制のもとにあっても、中国では一定期間の商業経済の隆盛期があり、商業ネットワークや都市社会、市場圏が形成され、文化的な消費財を生み出した。これには歴史にかかわる知識や教養の類も含まれるが、文化的実践の産物はこうした状況において流通し、村落社会へと浸透していったのである。これは中国的な特徴のひとつといえる。

現在、中国では市場化にともなって消費主義が急速な勢いで拡大している。人びとの日常生活を構成する様々な場面や領域において、多様な歴史が消費されている。したがって、歴史の資源化にかんする研究においては、歴史を生産する側＝歴史の書き手からばかりでなく、歴史を消費する側からアプローチしていくことも必要である。こうした双方向・複数の視点からの人類学的アプローチに基づく事例分析は、中国における歴史の資源化をめぐる諸主体の状況や相互の関係性をよりいっそう明らかなものにし、中国的文脈と特色の解明に寄与していくものと思われる。

はせがわ きよし

文教大学文学部教授。専門は文化人類学・現代中国社会論・少数民族研究。編著に『中国の民族表象──南部諸地域の人類学・歴史学的研究』（長谷川清・塚田誠之共編 風響社 2005 年）、論文に「〈森林〉の資源化と精霊祭祀のゆくえ──西双版納における『生態文化』のポリティクス」（塚田誠之編『民族文化資源とポリティクス──中国南部地域の分析から』風響社 2016 年）など。